

# 稲賀繁美氏の「鯛を太らせる蝦、あるいは螳螂の鎌の駄弁」 と題する誌上公開書簡——本誌30号への返答

若桑 みどり (美術史家)

結論的にいえば、私は冒頭5ページ後段の稲賀氏のことは賛成です。すなわち今回の意見交換は「建設的な応酬が不可能な時点で口を噤むべき」であると。われわれはいまそういう時点にいるというのが私の認識です。その理由は、第一に、ここには純粋に理論的、または思想的な論争以外の何ものか、強いていえば、同じく稲賀氏がいみじくも先ほど引用の箇所の上段に書いておられるような「不毛な罵り合い」、それがたとえ慇懃（無礼）な修辞学にくるまれているとしても、になっていく、またはすでにになっている、恐れを感じるからです。相互の誤解、誤読、言葉尻応酬という次元に墮す恐れ、またはすでにそうなっているという恐れがある以上、稲賀氏が期待しているように「後世の歴史家が参照して無意味ではないだけの意義と水準をめざす」ことも無理ではないかと考えます。

しかしながらその責任は最小限にみついても、半分私にあるわけです。その意味では、今回稲賀氏が反論されたことで、先回文章ではおおいに理解に苦しんだいくつかの箇所についてより明瞭な説明が得られたことは多としたいと考えます。

しかしながら全体として、「視点の交錯と価値観のせめぎあう現場に立って、『美術史』を形成する磁場の生態を分析し」てこられた氏自身が、そのせめぎあう視点の交錯する磁場のなかで、ジェンダー的視点をどのように意味づけあるいは位置づけているかという、「冷酷な」千野批判がおそらくそこから発したであろう、氏自身にとっての歴史的方法論におけるジェンダー的視点のもつ固有の意味づけが明瞭に示されなかったことはまことに残念です。

それに関連して最後にぜひ言言したいこと

は、9ページ左欄後段にあるような「ジェンダー史学（だけ？）は〈客観的な科学〉であり」云々という「ジェンダー史学無謬論」に私はまったく立っていないということです。すでに言ったかと思うのですが、ジェンダー史学とは数多い歴史的視点のなかの一つであり、ジェンダーの視点から歴史を再構成することです。そして氏もよくおわかりのとおり、ジェンダー的問題はそれ自身複合的な性格をもっているのであって、カルチュラル・スタディーズとして名付け得るであろう多くの複合した視点を内包するものだということをごここで再確認させていただきたいと思えます。

ただ、その場合においても、個々の歴史家が、自己の視点において過去または現在の問題を再構成する場合において何がもっとも重要な視点であるか、ということは歴史家の方法論ばかりではなく歴史家の問題の立てかたそのものにも、その結果にも、決定的に影響するものであるから、ある歴史家が固有・特殊な問題意識にジェンダー視点を中心にすえるということは当然ありうることであり、それこそがその歴史家のアイデンティティーであると思えます。千野氏はそのような歴史家であり私もまたそうです。「あなた」と「わたしたち」はちがうのだ、というのはまさしくその意味においてです。しかし、私と千野氏が同じであるのはその時点までであり、千野氏と私もまた、その問題意識において、その解決法において、ちがっているのは当然であり、差異（それがどのような差異であるかは別にして）をもっているのも当然です。

では、稲賀氏自身は「視点の交錯」の磁場のなかでジェンダー視点にいかなる意味を与えているのでしょうか。氏は複合的視点に立

つと表明しておられる以上、そこにはジェンダー的視点が挿入されないはずはありません。そうであれば、第一に非難されるべき相手は単眼的視点に立つ、より権威ある、よりエスタブリッシュされた、かの「オーソリティー」らではないでしょうか。にもかかわらず、まずはジェンダーを撃った、という事実は否定

しようもありません。そこから明瞭にジェンダーの「敵」である視覚化された相手よりも、一層手ごわい存在を氏のなかに感じとった私の側に「恐怖にも似たりアクション」が生じたとしてもあながち私の被害妄想とばかりはいえないでしょう。